

論文の内容の要旨

論文題目 中村敬宇の思想—幕末・明治初期における儒学的「道」の展開—

氏名 李セボン

本稿は、中村敬宇（正直、天保三（一八三二）年～明治二十四（一八九一）年）の思想の内在的把握を主題とする。その際、敬宇の思想的な基底を為し、終生、変わることなく思想の拠り所とした儒学の文脈に即して彼の思想の全体の見直しを試みる。それは彼自身における儒学の文脈を重視するということであり、その自生的なあり方を捉えることを意味する。

敬宇は、幕末、徳川公儀直轄の昌平坂学問所の御儒者であった。彼は、御儒者でありながら、つとに蘭学や英学を学び始め、自らの強い意思によって、慶応二（一八六六）年には遣英留学生団の取締役として渡英した人物である。明治維新以後は、『西国立志編』（原著：Samuel Smiles, *Self-Help*, 1859）や『自由之理』（原著：J. S. Mill, *On Liberty*, 1859）などの翻訳書を刊行した。それは、西洋の「文明」の具体的な在りようとその根源を追究した敬宇の思想的な軌跡を表すものである。一方、彼は、西洋「文明」の根源にキリスト教があることを知り、その理解を深め、まだ切支丹禁制の高札が掲げられていた時期から、一貫してキリスト教信仰の自由を擁護・支持した。そして明治七（一八七四）年には、本人も洗礼を受けている。しかしながら、敬宇は唯一信仰としてキリスト教を擁護したわけではなく、様々な「教法」の中の一つとしてキリスト教を捉えていた。また、明治十年頃からの彼は「漢学」の再興を主張した。儒学の道徳的な側面が薄れていく当時の「漢学」教育への危惧がその根底にあった。それは、キリスト教への擁護と並行して行われた。晩年には、ユニテリアニズムを知り、特にエマソンの思想に傾倒した。

従来、敬宇は、近代化へと展開する思想の前段階に位置する「啓蒙」思想家として把握される

傾向があった。そこで「啓蒙」の語は、明治維新を機に日本の「近代」が始まるという歴史観に立ち、概ね西洋の「近代」を基準に、それに合致すると見なされる方向へと人々を教え諭すという意味で使われた。そして、「啓蒙」という語に込められた「近代」性の論理が、思想的な価値の評価に繋がるようになり、いわゆる「前近代」の産物の儒学を抛り所とした彼の思想は、「啓蒙」思想としての「限界」を指摘されるが多かった。

しかし、以上のような先行研究の流れは、敬宇自身の立つ思想的な文脈を度外視したものである。そこで、敬宇の思想研究において次のような具体的な三つの問題が生じたように思われる。第一に、彼の前半生に当たる維新以前の時期への相対的な無関心である。第二に、受洗したという事実に基づいて、彼におけるキリスト教の意味をキリスト教徒の信仰と見なす傾向である。第三に、その翻訳書を分析する際に、現在の西洋政治思想の常識を前提にし、評価するという問題である。

本稿では、この三つの問題を軸に、各章においては、次のような課題の解決を試みた。

第一章では、敬宇の維新以前の時代、つまり、昌平坂学問所の御儒者時代について扱った。従来、当該時期の文献については、詳細な検討を欠き、その思想的な特徴は、往々、「折衷的」という表現によってまとめられてきた。そこで本稿では、彼が「学者」というアイデンティティを軸に、朱子学の論理をもって「興学」を主張していたことを明らかにし、従来の曖昧な「折衷」性という捉え方に異議を唱えた。

第二章では、尊王攘夷運動が激化していく文久年間から、慶応二年のイギリス留学、そして慶応四年の帰国までの時期に注目した。御儒者の身分で洋学を学び、開国説を主張していた敬宇が、留学前までに感じていた孤立感を浮き彫りにしつつ、彼が留学を希望した理由、そして、イギリス滞在を通じて得た思想的な発見について論じた。特に、明治期の敬宇の思想を規定する「敬天愛人」という表現が初めて登場する「敬天愛人説」（明治元年）を集中的に分析し、それが敬宇における新しい「道」の内実であることを明らかにした。

第三章では、帰国後の静岡時代（慶応四年から明治五年）における重要な史料、『請質所聞』（明治二年）の全面的な解説を試みた。未刊の自筆本である本史料は、統一的な議論というよりは、論点の列挙であり、それ故に、従来は、キリスト教の教理理解の一端として部分的に取り上げられるに止まっていた。しかし本稿は、その全面的な分析を通じて、敬宇の思想形成における本史料の重要性を説いた。特に、「敬天愛人」の思想が、因果応報（「罪福之説」）を軸に展開するものであることを明らかにし、それに基づいた敬宇の「天」・「上帝」理解の論理構造を解明した。

第四章は、静岡時代の最初の翻訳作品である『西国立志編』を主題とした。その際、敬宇が翻訳に取り組んでいた明治三年の状況に目配りつつ、「敬天愛人説」と『請質所聞』の分析から得た知見を足掛かりにその翻訳の意義について論じた。また、従来は副次的に参照されるに止まっていた七編の独立した論説である『西国立志編』の序文類についての考察に重点を置いた。それによって、敬宇が『西国立志編』へ寄せた共感の内容を分析しつつ、直後の翻訳書である『自由之理』との繋がりを浮き彫りにすることができた。

第五章では、もう一つの訳述書『自由之理』を取り上げた。ここでは、『西国立志編』とは対照的に、原書の趣旨を意図的に読み替えたかのような記述が目につくという事実に注目し、敬宇の *On Liberty* 理解の過程を再構成した。従来、特に *society* の訳語に「仲間連中、即ち政府」が当てられたことをめぐる議論、即ち、ミルのいう個人に対する「多数の専制」(*society* 対 *individual*) という構図が、「政府」と「人民」という構図に置き換えられた意味につき、関心が集中してきた。しかし、なぜ敬宇がそのような解釈をしたのか、その原因は十分に説明されなかったところ、本稿ではその論理の解明を試みた。端的に言えば、それはミルと敬宇との間にある人間の本性に対する理解の違いに起因する問題であった。

第六章では、全体の議論を踏まえた上で、敬宇における「教法」と「漢学」の意義について論じた。彼にとってキリスト教は「教法」の一つであり、それは必ずしも信仰に基づく「宗教」の意味ではなかったことを明らかにした。また、明治十年を前後する時期から、彼が「漢学」の再興を主張しはじめた背景を説明し、そこから敬宇における儒学の意義を確認し得た。敬宇の主張は、その根底において「天」と結び付いており、その上で「教法」と「漢学」とが調和したものであった。それが、晩年の彼のユニテリアニズムへの傾倒、そして、その教育勅語草案にも表現されているという点を究明した。

中村敬宇は、終生、「孔子の道」を敬仰し、その実践に勉めた。その意味で彼は儒者であった。数々の彼の活動——留学、翻訳、受洗、女子教育など——は、すべてその一環であった。その際、「天」を諸価値の源泉に置いていた点で敬宇の思想は一貫しつつも、その天人相関の論理は場面によって形を変えて登場した。「天」から賦与された人間の本性が善であること、それが人類普遍の事実として道徳の大前提であることが、彼の思想を根底から支えた。また、彼にとって性善説は、人間の生来的な性質を善と見做すことで世の全てを楽観するような単純な人間観ではなく、本来の善性を回復するための厳しい自己修養を必ず伴い、そのための努力を「間断」無く続けねばならないものであった。それ故に敬宇は、儒学の伝統に即し、修養の方法として「学問」を最も重視したのである。人は、「学問」を通じて「道」に至り、本来の「性」を回復し、「天命」を知ることができる。『中庸』首章の「天命之謂性、率性之謂道、修道之謂教」に基づく人間観・世界観が、生涯、彼の思想の基礎にあった。

本稿は、以上の議論を通じて、幕末・明治初期の思想界における中村敬宇の位置づけ、儒者の思想が持った可能性を捉え直したものである。